

論文要旨

ショパンのピアノ作品の調性構造—調的参照点としての強調音の構造的機能

西田 諭子

本研究は、ショパン（1810~1849）のピアノ作品を事例に、楽曲分析を通じて 19 世紀前半の音楽の調性構造の一側面を明らかにすることを目的とするものである。分析に際し、この時代の音楽に関しては従来あまり論じられることのなかった特定の音高の強調、およびそれによって形成される調的参照点に特に着目することで、調性解体の徴候の一つである〈単一の主調による支配の弱まり〉に関して新たな視点を提示する。

分析対象は、*Wydanie Narodowe Dzieł Fryderyka Chopina*（通称『ナショナル版』）所収のショパンのピアノ独奏作品のうち、作曲者の存命中に出版された諸作品、および出版社に送られたものの出版されなかった二作品である。

本論は 9 章からなる。第 1~3 章では楽曲の大構造における調性構造、第 4~5 章では部分構造における調性と和声構造、第 6 章では強調音と調性との関係についてそれぞれ論じ、第 7 章以降で分析結果の解釈を行う。

第 1 章では、楽曲の大構造における調進行の特徴について整理し、ショパンのピアノ作品に多く見られる 3 度/2 度関係調への転調、およびそれらの調のさらなる逸脱・拡張について概観する。

第 2 章では、曲全体の調進行の中での特定の要素の配置に着目し、構造的ドミナントの後退、再現部分での主題の再現と主調の再現との不一致を取り上げる。ショパンのピアノ作品には再現部分直前あるいは再現部分以降、さらにはコーダ直前まで構造的ドミナントの確立が保留される事例が見られ、それらの多くは、3 度関係調の形成・逸脱・拡張、流動的調進行などを経て構造的ドミナントに達している。また、再現部分において主調以外の調で主題が再現している事例では、主題が主調の再帰に先立って再現され、主調は遅れて形成されることにより、再現部分があたかも経過的部分のように始まっている。

第 3 章では、曲の一部分で一時的に調性が両義的になっている事例、あるいは曲全体を通じて二つの異なる調がともに主調的求心力を有することで二極的な調性構造が生じている事例について検証する。前者では、頻繁な調の交替、二通りの解釈の可能な和声構造、導音の回避、旋法の導入によって調性が揺れ動き、一方後者の多くは、曲の始まりと終わりなどで調が異なる。

第 4 章では、一つの主題内で 3 度関係調へ転調している事例を取り上げ、中でも、こうした部分構造における色彩的転調が大構造の二極的な調性構造を暗示し、小構造と大構造の調構造が並行関係を形成している事例について検証する。

第 5 章では、主和音が回避される諸様態として、代替和音の使用によって曲の冒頭での主和音の出現が遅らされている事例、あるいは曲の後半部分以降まで主和音に安定することなく主調が形成されている事例、偽終止などによって属七和音の主和音への解決が避けられている事例を中心に取る。

第 6 章では強調音の構造的機能を論じる。まず強調音を定義し、主音・属音・サブドミナント的な vi

度音の保続音の働きを概観した後、そうした和声的機能を担っていない調的参照点について検証する。機能的和声進行によって主音＝主調が明確に認識される中で主音以外の特定の音高が反復・保続される場合、その音高は主音とは別の第二の調的参照点として機能し、楽曲の一部あるいは全体の構造に一種の凝集性・連続性を与える働きをする。こうした第二の調的参照点は多くの作品に見られる。

第7章では、第6章までの分析から明らかになった傾向として、先ずドミナント・トニック軸もしくは単一の主調による支配の弱体化を指摘する。第1章で取り上げた3度/2度関係調への転調およびそれらの調の逸脱・拡張は、調的方向性を曖昧化し、主調と属調との対立と主調への回帰に立脚した古典派以来の調性構造の枠組みからの一時的あるいは完全な自立をもたらすものである。このほか構造的ドミナントの後退によるドミナントの求心力の低下（第2章）、偽終止による調性の不安定化（第5章）も、ドミナント・トニック軸の弱体化を示す現象である。また、主調の再現の延引（第2章）、両義的・二極的な調性構造（第3章）、主和音確立の保留（第5章）には、主調支配の後退、単一の主調による支配の弱体化が認められる。第4章で指摘した大小両構造間の緊密な並行関係も、曲全体に構造的な一貫性を与えながら、同時に調的中心の二極化を浸透させていると考えられる。

そして本論文では、第二の調的参照点を形成する強調音（第6章）を、単一の主調による支配を弱める新たな要因として指摘する。第二の調的参照点は、楽曲の一部あるいは全体の構造的凝集性を強化するが、同時に、主音の求心力によって保たれている主調の調的凝集を溶解し、結果的に主調支配を浸食しているものである。

第7章ではほかに、調的参照点を措定することによって、これまで指摘されてこなかった新たな構造が見出された事例（《幻想曲》op. 49、《スケルツォ》op. 31、op. 39、《ソナタ》op. 58）についても総括するほか、第8、9章では、主に和声・調性の影響で強化される構造的連続性、調的参照点を形成する強調音とショパンのピアノリズムとの間の密接な関連についても考察する。

結論部分では特に、ショパンにおいては調性解体の徴候としての主調支配の浸食が、半音階的書法のほかに調的参照点の二重化によっても実現されていることを確認し、そうした調的参照点の複数化を、後代の複調性の萌芽として指摘する。